シリーズ 第81回

美作角田氏の興亡②

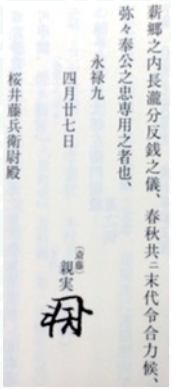
鎌倉時代の承久の乱（一二二一）の功績によって、関東から薪郷へ移住した御家人、角田氏の動向について、わずかに残された史料から探ると、元弘三年（一三三三）に、美作国御家人の角田弥平入道正秀という人物に関する書状が残されています。

これによれば、九月二十一日に鎌倉を出発して、十月二日に足利尊氏の下へ馳せ参じたことを報告しているもので、尊氏の花押（サイン）をもらっています。この角田弥平入道正秀は、その名から想像しても、角田弥平治の子孫にあたる人物である可能性が高いでしょう。

杉坂峠（美作市）

この頃は、同年五月に鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇による建武の新政が始まった直後のことです。弥平入道正秀は、この頃には鎌倉幕府を倒し、室町幕府を開いた足利尊氏の配下として働いていたことがわかります。

しかし、室町幕府の成立後、将軍となった尊氏とその弟・直義の間で内紛が起こり、両者の間で抗争が続きます（観応の擾乱）が、この時角田氏は直義派に属し、『太平記』には、観応二年（一三五一）、備中国の合戦で勝利した尊氏派の武将・高師泰が、播磨国（兵庫県西部）へ引き揚げようとしますが、垪和氏（久米郡の武士団）と角田氏の軍勢七〇〇余人が播磨と美作の国境の杉坂峠で師泰を討とうと待ち構えます。しかし、合戦に勝利し勢いづいている師泰の配下、河津・高橋の軍勢に、一矢も射ることできず蹴散らされ、谷底に落とされて一人も残らず討たれてしまいました。と書かれています。


薪郷之内長瀧分反銭之儀、春秋共ニ末代令合力候、
弥々奉公之忠専用之者也、
永禄九
四月廿七日
（斎藤）
親実
桜井藤兵衛尉殿
斎藤氏が家来に出した書状の内容
（『鏡野町史』史料編より）

薪郷一帯（薪森原）

その後の角田氏については、応永二十七年（一四二〇）に、角田松原という人物が美作国から熊野参詣をするという史料がありますので、角田氏は美作において勢力を保持していたことがわかります。

また、室町幕府の将軍直属の家来（奉公衆）を編成した名簿（御番帳）を見ると、永享以来御番帳（一四二九～）に角田弥平次、文安年中御番帳（一四四四～一四四八）に角田孫平次の名前があります。さらに、室町幕府の文官の文正元年（一四六六）の日記にも、将軍外出のお供の中に角田弥平次の名があります。この弥平次・孫平次も鎌倉の御家人・弥平治の子孫であったとすれば、角田氏は美作国内より京都での活躍が主であったようです。

戦国時代の角田氏に関する美作の史料は残っておらず、この地で活躍した形跡はありません。しかも、小田草城（馬場）を拠点とする斎藤氏が、薪郷の土地や税金を家来に与えることを保証した手紙が存在することから、この頃には薪郷の支配権も失っていたと思われます。

永禄六年（一五六三）の将軍の側近の名簿には角田采女正藤秀という名があり、弥平入道正秀と同じ「秀」の字を持つことから、弥平治の子孫である可能性も考えられます。また、この時期に播磨・備前・美作に勢力を広げていた大名・浦上氏の家臣の中にも角田姓の者が数名いますが、こちらも美作の角田氏との関わりは不明です。

ただ、「郷の村誌」によれば、角田の姓を刻んだ寛永二十一年（一六四四）の自然石の供養碑があったことが書かれており、美作での支配権を失った後も角田一族は江戸時代まで薪郷に存続していたようです。

参考資料：『鏡野町史』、『岡山県史』、『岡山市史』、『太平記』、『大武鑑』、『斎藤親基日記』、「郷の村誌」、角田勝治氏の調査資料

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/